社会科

「ヴェトナム戦争を体感する　～ホーチミン・フエ・ハノイの旅」
ヴェトナム戦争のビジュアル教材化の取り組み

山　田　　孝

【抄録】 2005年夏、ヴェトナムのホーチミン・フエ・ハノイを訪問した。この旅は、平成17年度科学研究費補助金（奨励研究）研究テーマ「現代史の世界史教育における新しいビュジアル教材の研究～ヴェトナム戦争の教材化の取り組み～」の一環としての現地調査とビジュアル教材を作成するための取材旅行であった。本報告では、「ヴェトナム戦争の被害の痕跡」の調査と取材、それから「現在のヴェトナム」についての簡単な報告を行うものである。

【キーワード】 ヴェトナム戦争　枯葉剤　戦争証跡博物館　ヴェトちゃんドクちゃん　子どもの家

はじめに

今年(2006年)12月にドクさんが結婚するというニュースが日本に伝わってきた。2005年８月５日の夜、ホーチミン市内のレストランでドクさんと夕食を共にする機会があり、その時一緒に来た女性が結婚相手であったようだ。その時は、今つきあっていると教えてくれたが、ついに結婚にこぎ着けたのである。この結婚のニュースは、私にホーチミンのレストランで二人にあった日のことを思い出させた。前途は多難ではあるが二人の幸せをお祝いしたいものである。

ヴェトナム戦争後の1981年、二重胎児として生まれたのがヴェトちゃん、ドクちゃんであった。1988年には分離手術を行い、ドクちゃんは一人でも動くことができるようになった。しかし、お兄さんのヴェトちゃん未だに寝たきりである。ヴェトちゃんドクちゃんのニュースは断片的に日本にも伝わってはきていたが、実際のところ二人はどうなっているのかはよく知らなかった。今回、ヴェトナムを訪問して、大人になったドクさん（もはや大人なのでドクさんと呼ぶことにする）に会い、お話を聞くことができた。

ヴェトナム戦争中にアメリカ軍が大量に散布した枯れ葉剤が奇形の原因とされており、現在に至ってもなお身体に障害のある子どもたちが生まれ続けている。しかし、現在も調査・研究が進められているのだが、未だにその被害の実態は十分に解明されているわけではない。

旅行日程

日程	日時	出発地	内容
1	８月３日	名古屋 ホーチミン	中部国際空発 ホーチミン着
2	４日	ホーチミン	午前　ベトちゃんドクちゃん訪問　　ベトナム平和村 午後　戦争証跡博物館見学
3	５日	ホーチミン	マングローブジャングル解放軍基地跡地訪問
4	６日	フエ	フエに移動 ・「子どもの家」事務所訪問 ・「子どもの家」学校施設見学 ・フエ医科大学　ニャン先生訪問 ・障害児の授産事業施設見学
5	７日	ハノイ	・フエ阮朝遺跡見学 ・天母寺見学
6	８日	ハノイ	ハノイに移動 ・ホー＝チ＝ミン廟、記念館見学
7	９日	ハノイ ホーチミン	・革命博物館見学 ホーチミンへ ホーチミン発

8	10日	名古屋	中部国際空港着

1. ヴェトナム戦争を伝える

2005年は、アジア太平洋戦争の敗戦から60年目であった。そして、今も戦争体験者の方々から、戦争についてのお話を伺い、戦争の悲惨さを後世に伝える取り組みを授業の中でも行っている。この活動はこれからも続けなくてはならないが、次の世代にどのように戦争の事実を伝えていくのか、アジア太平洋戦の体験者の方々が高齢化していくなかで、「身近な戦争」を伝える必要性を感じている。自分の言葉としてどのような戦争の事実を伝えて行けるのか、新たな教材の可能性を考える時期に来ているのではないかと思う。特に、2002年の同時多発テロ以降、再び戦争の驚異は身近に感じられるようになってきて・・・。

私の少年時代にも、身近に戦争を感じる場面があった。それが、ヴェトナム戦争であった。実体験から戦争を語るのであれば、少年時代に体験した、間接的にではあるのだが、ヴェトナム戦争を伝えることが私にできる戦争体験の継承になるのではないかと考えている。子どもの頃に見たニュースは、ヴェトナム戦争の映像が圧倒的に多く、毎日北爆の様子が報じられていた。そして、そのいくつかの映像には、嘉手納から飛び立つ黒々とした巨体の爆撃機B52の映像があった。これは、沖縄学習の私の原点になっている。そして、1975年のヴェトナム戦争の終結は、何よりもうれしいニュースの一つであった。当時の高校卒業アルバムにもこの記事が紹介されていた。何よりも、今も思い出すのは、ヴェトナム戦争が終わったという晴れやかな気持ちである。

こうした思いから、自分の記憶や経験からヴェトナム戦争を教材として再構成することを考えた。平成12年度科学研究費補助金（奨励研究(B)）では、「絵画・映像・音楽教材を総合化した近現代史（世界史）の授業研究」を行い、「映像の世紀」等の市販のビジュアル教材を活用した授業実践について研究した。そして、今研究では前回の研究を発展させ、自らビジュアル教材を作成して授業化する取り組みとして、科学研究費補助金（奨励研究）研究テーマ「現代史の世界史教育における新しいビュジアル教材の研究～ヴェトナム戦争の教材化の取り組み～」とした。この奨励研究では、自分の体験と重ね合わせて世界史の一場面としてヴェトナム戦争を教材化するための試みである。そのため、実際にヴェトナム戦争の地を訪問してビジュアル資料を収集してきた。

まずは、ヴェトナム戦争を伝える旅の記録を報告する。

2. ベトナム平和村

8月4日、ホーチミン市のツーゾー病院内にあるヴェトナム平和村を訪問した。平和村には、障害を持った子どもたちが、治療を受けながら生活している。

平和村で障害児の治療に当たっているタン先生に直接お話を伺うことができた。タン先生は、障害児の教育について、「身体の障害がある子でも、学習の意欲と能力のある子には教育の場が必要である。特に、日本で教育の機会があれば、是非教育施設を教えてほしい」とのことであった。実際に、身体に障害のある子どもたち会ったのだが、器用にコンピュータを操作していた。彼らが日本で専門的な教育を受けられるなら、そのハンディを克服して技術を習得することが可能ではないかと思わされた。一方で、重い障害で寝たきりの子どもたちも収容されていた。ドクさんのお兄さんであるベトさんもその一人であった。病室に案内されて、寝たきりのベトさんに会うこともできた。その様子もビデオに撮ってくださいと案内してくれた方が言ってくれたのだが、どうしてもビデオを向けることができなかった。

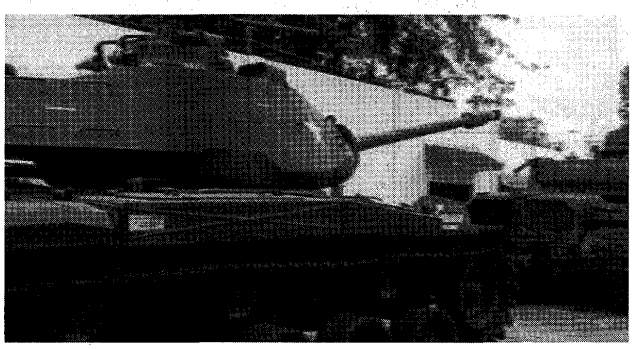
この病院で治療を受けながらリハビリや教育を受けることができるのは、まだ一部の子どもたちであり、まだ多くの子どもたちが入院できないことかも課題であると案内していた方が説明してくれた。

施設を見学しながら、そこで働くドクさんにも会うこともできた。しかし何よりも、ドクさんは元気で病院内を自由に動き回って看護婦さんや病院のスタッフと仕事をしていた。非常に明るくて、よくしゃべった。そし

て、何回か日本に来たことがあり、日本語も少しわかるようであった。

この間のいろいろな思い、分離手術をしてからの、ドクさんのベトさん対しての思いはについて、８月５日の夜にホーチミン市内のレストランでドクさんと夕食をとったときに聞くことができた。もちろん、ドクさんは１人でオートバイを運転してレストランにやって来た。

3. 戦争戦証博物館



ホーチミン市内にあるヴェトナム戦争の歴史を伝える博物館である。博物館と言ってもほとんどが屋外にあり、実際に戦争で使われた戦車や大砲、爆弾などの戦争遺物が展示してある。また、記録写真なども展示してあり、かなり凄惨な光景を撮したパネルもあった。この他に枯れ葉剤による被害状況の記録や、枯れ葉剤の影響と思われる奇形胎児のホルマリン漬けなども展示してあった。これらの記録は、戦争による被害の悲惨さやアメリカ軍による残虐行為を現在の私たちに伝えるものである。

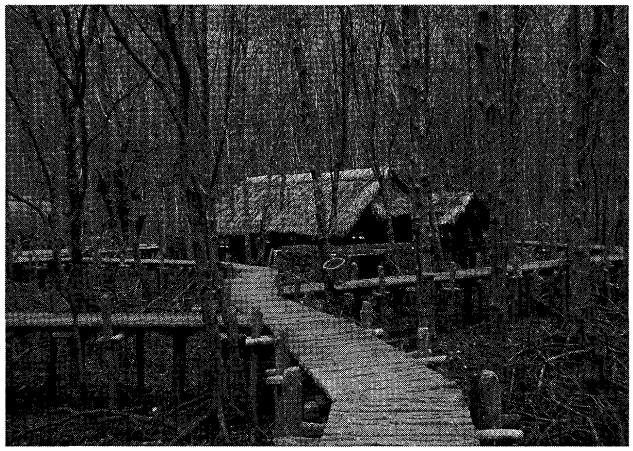
この博物館の中でも、とりわけ目を引いたのが悲惨な戦争を伝えるものではなく、ベトナム戦争中に世界各国でベトナムを支援する取り組みが行われていたことを紹介していたコーナーであった。ベトナム戦争を戦っている中で、ベトナムの人たちが世界のそうした運動に支えられたことが、そこに現れていた。もちろん日本でのベトナム反戦の運動も紹介されていた。

4. マングローブジャングル解放軍基地跡地訪問

ホーチミン市内から車で約２時間ぐらいの距離のところにあるガンゾーが訪問先である。ここは、ベトナム戦争時、枯れ葉剤によってマングローブが砂漠化した場所である。今では、マングローブの植林もすすみ、マングローブ保護地域になっており、７万5000ヘクタールの広さに約30種類のマングローブが育成するまでに再生している。最近聞いた話だが、名古屋市立高校の理科の教員グループがマングローブの植林に協力しているとことである。

実際に訪問してみても、枯れ葉剤の影響を見ることはできなかった。枯れ葉剤で枯れたマングローブの根が一つ道ばたに残っていただけで、マングローブジャングルの保存が進んでいた。ガンゾーに続く道も整備されており、舗装化が進んでいた。これは、リゾート地として開発が進められているとのことであった。ホーチミンから郊外に出ると、畑が広がっていたが、ところどころに真新しい洋風の家が建てられており、この点を見ただけでも経済発展の著しいことを知ることができた。

ガンゾーの解放軍基地は復元されており、猿やワニも飼育されており一応観光地になっていた。入り口近くの船乗り場からエンジン付きのボートに乗って、マングローブジャングルの細い水路の中を抜けて10分程度進むと、解放軍基地の跡地に到着した。そこも復元されており、船から下りて木で作られた通路でつながったそれぞれの施設を見学してまわった。戦争中はこの基地から出撃して、アメリカ軍の基地を幾度となく攻撃して戦果を上げていたらしい。ガイドのチュンさんのお父さんもここで戦っていたそうである。基地の建物はそれぞれ木で作られており、アメリカ軍からの攻撃を受けたらかなり危険なように思われたが、マングローブに覆われており発見するのは困難なようであった。近づくのもボートを使って迷路のような水路を抜けて行かなくてはならず、さらに野生のワニもおりかなり危険だ。解放軍の兵士さえもワニの犠牲になっている。だからこそ、アメリカ軍は枯れ葉剤を散布して徹底的にジャングルを破壊して、解放軍の基地を発見し、破壊しようとしたのである。



マングローブジャングルは海に近く、ここから車で30分も行くとそこはもう海岸である。今は海水浴場となっており、地元も人たちが海水浴に来ていた。

5. フエ　テト攻勢の舞台

ヴェトナム最後の王朝阮朝の首都がおかれた場所であり、世界遺産にも登録されている。町並みも王宮が置かれた旧市街と新しく作られた新市街とに分かれており歴史の面影を残している。また、1968年のテト攻勢により南ベトナム民族解放戦線にほぼ市中全域が占領され、南ヴェトナム政府軍やアメリカ軍と激戦が展開された。映画「フルメタル・ジャケット」の中でもフエの市街戦が描かれている。旧市街地や世界遺産に指定された阮朝皇

帝廟にも、ヴェトナム戦争で破壊されてそのままのところも残っており、そういった点でも歴史的な町と言える。

フエを訪問した理由は、そうした歴史的な町であると言うことと、ストリートチルドレンや恵まれない子どもたちを支援する組織「子どもの家」があること、また、障害児を支援する組織があることもなどから選んだのである。

6. ベトナムの「子どもの家」を支える会

「子どもの家」は、元東京公立小学校教諭の小山道夫先生がフエ市周辺にいるストリートチルドレンの自立支援を目的として設立したものである。小山先生の努力により市当局も動き、今ではフエ市人民委員会と提携し運営している。私が訪問した日は、あいにく小山先生は山岳地帯に出かけていて留守だったので、ベトナム事務所長のバオ・ミンさんにお話を伺うことができた。新市街にある事務所兼刺繍の販売所でお話を伺い、子どもたちが実際に生活する「家」は旧市街にあったので、そこも案内していただいた。この時は、１年間の授業が終わり、夏休みに入っていたので家族のいる子たちは田舎に帰っていた。「家」にはフエ市人民委員会の担当者もおり、市の人民委員会の取り組みについてもお話を伺えた。

案内してくれた事務所長のバオ・ミンさんも、フエのガイドのアインさんも小山先生が日本語教師をしていたときの生徒であった。

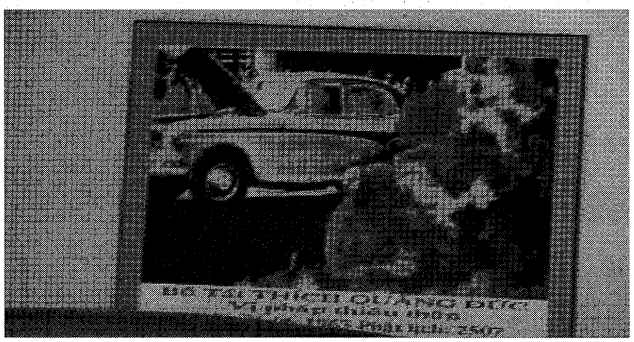
7. フエ医科大学　ニャン先生

フエ医科大学には障害児、遺伝カウンセリング事務所（OGCDC）が1999年に設立され、日本やアメリカ・ヨーロッパの人たちから支援されて運営されている。OGCDCの取り組みとしては、手術支援事業・障害児の職業訓練事業・障害児の移動用器具の貸与事業などがある。このOGCDCの取り組みの中心であるニャン先生をフエ医科大学の研究室に訪ねた。そこで、ニャン先生からOGCDCの取り組みについて直接お伺いすることができた。また、この支援事業の一つである障害者・貧困者に対する授産事業施設も見学させてもらった。今回の旅行の目的の一つであるビジュアル教材の作成のために、映像としての資料も撮らせていただいた。これは、現在のヴェトナム社会の取り組みとして教材化していくつもりである。

障害者の授産事業施設

8. フエ、ティエンムー寺（天母寺）

フエの町を流れるフォー川をドラゴンボートで20分ぐらい下って天母寺に行く。船を下りて、川の土手を上ると天母寺がある。フエでも由緒あるお寺であるが、この



お寺が重要なのはヴェトナム戦争当初に戦争に反対して抗議の焼身自殺をした僧侶がこのお寺の住職であったことである。この焼身自殺の場面は、記録映像としても全世界に配信もされている。「映像の世紀第９集ベトナム戦争衝撃」の中に登場している。また、少し前までは教科書にもこの焼身自殺の写真が掲載されていたが、あまりにも残酷な場面と判断したのか最近はカットされている。この場面は、私の中に重要な一場面として刻まれていたので、この地を訪れてみたかったのである。実際に訪問して、長年疑問に思っていたことがここで解消することができた。それは、記録写真の片隅に車が写っていたことが気になっていたのだが。現在、天母寺ではこの車が住職の記念として展示されていた。話を聞くと、住職が自分でこの車を運転してホーチミン（当時はサイゴン）に出かけていったそうだ。だから、記録写真の傍らにはこの水色の車が写っていた。このことは、実際に現地に行って取材して実感できたことであった。

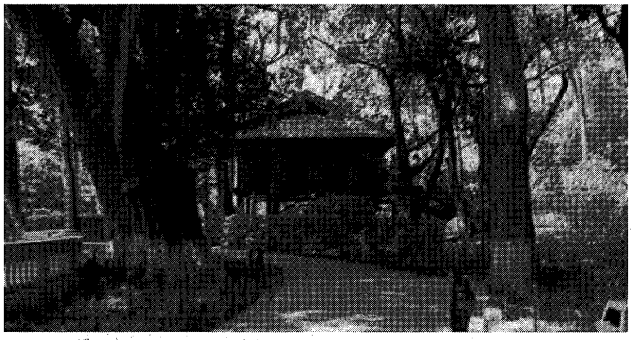
9. ハノイ

ハノイは、現在の首都でもあるが、北ヴェトナムの首都としてアメリ軍の北爆にさらされていた都市である。ヴェトナム戦争終結から30年を経過した今では、当時の北爆の被害の様子を見ることはできなかった。

現在のハノイの街は、近代化されたビルと昔の面影の

残る古い町並みとが共存していた。街の中心部には、ホアンキエム湖があり、緑と水があふれていた。フエでもそうであったが、日中は蒸し暑く歩いているとすぐに汗があふれてきて、ズボンまで汗でぐっしょりとなってしまう。南のホーチミン市は、夕方に激しくスコールが降って日中もそれほど蒸し暑さを感じなかったのだが、フエから北の方が猛烈に暑さを感じた。

ハノイでは、「北」から見たヴェトナムの歴史を取材に行った。ホー＝チ＝ミンの家。これは、ホー＝チ＝ミンが1969年まで住んでいた家がそのまま保存されているものである。1958年に建てられた木造高床式の住居で、とても質素で素朴な感じがして故人の人柄をよく表している。



10. 革命記念館

ヴェトナム人民の抵抗と独立への苦難の歴史が、その記念の品々とパネルで時代ごとに紹介されている。特にサイゴン陥落やディエビェンフーの戦いのコーナーが充実していた。また、ホー＝チ＝ミンに関わる資料も多く展示されており、「映像の世紀第６集独立の旗の下に」で紹介されたホー＝チ＝ミンの写真もここにあった。映像の中でしか見ることのできなかった資料に出会うことは、歴史のリアリティを伝える意味ではとても重要なことであると考える。この点において、直に歴史的資料に触れられたことは大変貴重な体験であった。こうした体験をどのように教材化して、授業の中で伝えていくかがこれからの課題である。

おわりに

1975年ヴェトナム戦争が終結した年、日本は戦後ちょうど30年だった。「もう戦後ではない」と言われて久しい時期であった。2005年は、ヴェトナムにとって戦後30年でめざましい経済発展の途上であった。30年前の日本を見るようでもあった。その一方で、枯れ葉剤の影響と思われる障害児たちが、孫の世代でも生まれている。遠くなっていってしまう戦争と未だに生まれる障害児、枯れ葉剤のダイオキシンに汚染された大地が依然と残っているヴェトナム。現代史を教える中で、第二次世界大戦後の冷戦期に戦われたアジアの戦争をどのように教材化するのか。冷戦構造が終わり、一方で果てしない「テロとの戦い」が続く今日、もう一度ヴェトナム戦争をどう教えるのか考えてみなければならない

参考文献

・「果てしなき論争」 ロバート＝マクナマラ著　共同通信社
・「胎動するベトナムの教育と福祉」 黒田学他編著　文理閣
・「ホーチミン市の戦争証跡博物館ガイドブック」 安斎育郎他著　ウインかもがわ
・「これならわかるベトナムの歴史」 三橋広夫　大月書店
・「現代ベトナム入門」 松尾康憲著　日中出版
・「国際協力の時代」 鈴木元著　文理閣
・「アメリカの化学戦争犯罪」 北村元　梨の木舎

映像資料

・「THE FOG OF WAR」
・「フルメタル・ジャケット」
・「映像の世紀」